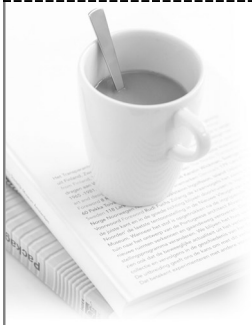

日本一の将棋指し

会員
軽部 龍太郎＜57期＞

あまり趣味が多い方ではなく，長続きしているのは以下の3つのみです。

1. 競泳　22年
2. 将棋　20年
3. 飼い猫の世話　11年

小学校に上がった私は将棋の魔力に取り憑かれました。何しろ，吊革に手も届かない自分が，大の大人をコテンパンにできるのです。「坊主強いなぁ。将来は名人だ」と，そんなお世辞を真に受けて得意気になっていました。

しかし，5～6年生ともなると，早くも才能の限界に気づきます。年下のガキんちょにとんでもなく強い連中がいるのです。10局指しても20局指しても全く歯が立ちません。将棋には運の要素がなく，盤上には対局者の実力差がむき出しで現れます。12にして勝負の世界の残酷さを知った私は，中学校進学と同時に将棋をやめました。一方の彼らはやがてプロの道に進んだのです。

その後，高校受験に失敗して男子高に進んだ私は，ふらふらと将棋部に迷い込んでしまいました。今から振り返れば最悪の選択ですが，人生においても「待った」は許されません。再びこの見栄えのしないゲームに手を出した私は，幼年期には気づかなかった真剣勝負の醍醐味，盤上に生まれる非日常的な緊張感を知り，本格的にはまりました。大学時代には，伝統ある母校の将棋部部長も務めることになります。男臭い静かな戦いに青春を捧げた私は，当然女性に全くもてない日々を送ったのです（そのせいではないような気もしますが）。

大学を出てからは，真剣勝負の機会も減りました。それでも年に何回かは社会人の大会に出場しています。

修習生時代には，ある大会で，瀬川晶司さんと対戦しました。瀬川さんは，その後，61年ぶりの特別プロ試験に合格し，各メディアで報道された存在ですので，ご存知の方も多いかと思います。

その将棋は，私が珍しく序盤から冴えた指し回しを見せて，有利な形勢のまま推移しました。しかし終盤に入ると，瀬川さんが持ち前の実力を発揮して一挙に盛り返し，私は痛恨の逆転負けを喫します。

終局後，脇で見ていた先輩が声をかけてきました。

「いやー，惜しかったね。勝ちきっていれば，『日本一将棋の強い法律家』だって自慢できたのに」

「いいんですよ。今の目標は『日本一法律に強い将棋指し』ですから」

「そうかい。ところで，将棋の本は今まで何冊くらい読んできたの？」

「さぁ？　何百冊だか。雑誌を含めたら数えようもないですけど」

「法律の本は？」

「・・・・・・」

初めて六法を手にした日からまだ7年。

前途遼遠です。